

「底が突き抜けた」時代の歩き方⁴⁵¹

「遠くを見つめる」チェ・ゲバラ－映画『モーターサイクル・ダイアリーズ』



チェ・ゲバラがTシャツとして甦っているらしい。ヨーロッパ（？）のサッカー場でもゲバラのアイコンが溢れていると聞く。カストロと共にキューバ革命を成功させたゲバラが、ボリビアでアメリカのCIAの工作により射殺されたのは67年10月であったから、もうそれから37年が経過していることになる。39歳の短い駆け抜けるような生涯であった。世界の若者たちの間でもしゲバラがもてはやされているとすれば、もちろんそれは左翼革命とは無関係だろう。革命の不可能生によってますます「永遠のゲバラ」が神格化されていくということではないと思う。ゲバラといえば、Tシャツにプリントされている写真（アイコン）であるように、ベレー帽を被った長髪にヒゲの、野性的で精悍な^{せいがん}貌付きを際立たせ、年齢的にももっともパワフルさを^{みなぎ}らせている男がどこか遠くを見つめているその絵姿に、まずなによりも誰もがイカれてしまうのではないか。

そう、ゲバラについてなにも知らない若者たちに理屈抜きで受ける要素があるとすれば、彼のその絵姿を描いてほかにない。キリストが十字架であるなら、ゲバラはその絵姿であり、どんなスターの写真よりも超カッコイイのだ。そして彼の風貌が堂々とした

美丈夫ぶりであるとして、おそらく誰をも魅了するのが彼の「遠くを見つめる」まなざしであろう。そのまなざしの強さにおいて、彼は誰にも忘れられない男となっているのだ。そんな遠くを射抜く強いまなざしをもった人間が、男が、いまの世界のどこにいる？

どこにもいないのである。革命の不可能性なんぞではなく、彼のような絵姿に引き絞られていく人物がこの世界のどこにもいなくなってしまったという事実が、存在の幼さと哀しさを深く漂わせている若者たちの心を深く揺さぶっているにちがいない。ゲバラは「革命をする人」以上に、「遠くを見つめる」絵姿が人の心に焼き付いて離れない人として、若者にも誰にも甦ってくるのだ。

ゲバラが「遠くを見つめる」人であったことは間違いないが、同時に「自分が思ったことをやる」人でもあった。猪突猛進という言葉がピッタリの人であった。いまでは「遠くを見つめる」ことなどできなくなっている若者は、彼の「遠くを見つめる」まなざしの強さに惹きつけられているが、「自分が思ったことをやる」ことができなくなっている若者はまた、「自分が思ったことをやる」彼にもきっと憧れたのだ。要するに、生きることが困難な閉塞状況に置かれている若者たちにとって、ゲバラとは無茶でもなんでもとにかく自分が思った方向に力強く突き進んでいることが実感される存在であった。養殖魚でない天然魚の活きのいい無鉄砲さに心躍らされるのは、コンクリートジャングルからすれば、あまりにも自然であろう。そんな奔放な生き方が必然的に招き寄せる、死が美しく感じられるギリギリの年齢での、しかも体制側に捕らわれて射殺されるといふ、ヒーロー特有の悲劇に彩られていることが誰の胸にも切なく響いてくるのだ。

ゲバラはいつから「遠くを見つめる」人になったのか。23歳の時に年長の友人とおんぼろバイクで恋人に別れを告げて出発した、アルゼンチンから6千^{キロ}のアンデス山脈を抜け、チリの海岸線からアタカマ砂漠を越え、アマゾン上流から北端に突き抜けてベネズエラに至る一万^{キロ}を超える、南米大陸縦断の壮大なルートを走破した旅こそが、ゲバラが「遠くを見つめる」旅にほかならなかったことを示唆するのが、ロードムービーとして撮られた映画『モーターサイクル・ダイアリーズ』である。製作総指揮を務めたのが米国の俳優・映画監督のロバート・レッドフォードで、「興味を持ったのは何が若い医学生を『革命家ゲバラ』に変身させたのか。23歳のときの南米縦断バイク旅行で、貧しく虐げられた人々を助けた経験が彼の方向を決めた『種』だった。それを描きたかった」(10/15、朝日)と語っている。

ゲバラに寄せるレッドフォードの想いは熱く、続けてこう重ねる。《メッセージは「何かをやるう」という熱意を持て。特にアメリカの若者たちにそう言いたい」。なぜなら、「この国はいま危険なときにある。23歳のゲバラが世界で何が起きているかに突然目を開いたように、アメリカの若者にも直面する危機に目覚めるよう促したいから。》

若さがもし激情を伴うものであるなら、激情に駆られる時を世界にむかって投げつけよ、ひび割れる世界がもし自分の中に入り込んでくるなら、そのひび割れをこじあけて踏み出す一歩に自分のすべてを賭けてみよ、彼はそう若者たちに呼びかけているのだ。

革命は書くものではなく「する」ものであるように、旅もまた書くものではなく「する」ものである。人生が夢見るものではなく生きるものであるなら、若者よ、当然の失敗を生きている中に自分を見出し、世界を驚嘆みにせよ、という響きがそこに込められているだろう。

映画『モーターサイクル・ダイアリーズ』の監督は、ベルリン映画祭金熊賞に輝いた『セントラル・ステーション』（９９年）のウォルター・サレスである。アルゼンチン出身のゲバラと同じ南米人であるブラジル出身のサレスは、レッドフォードから映画化の話を持ちかけられたとき、「英語ではなくスペイン語でやること、ラテンアメリカの俳優を使うこと」の二点を条件に引き受けたことや、レッドフォードが手を尽くして映画化をバックアップしてくれたこと、そして脚本のリサーチのためにキューバの首都ハバナに飛んで、ゲバラの家族や、ゲバラと共に旅をしたもう一人の主人公であるアルベルト・グラナード本人と出会ったことなどを語って、インタビュー（『キネマ旬報』０４年１０月上旬号）に次のように答えている。

「もしゲバラの家族と、アルベルトの手助けがなければ、映画を完成することはできなかった。青年二人が冒険を求めて、南米大陸を縦断していくうちに、社会的、政治的な現実を目覚め、将来につながる何かをつかみ取っていく。この旅自体が、ラテンアメリカン・アイデンティティともいうべきものなんだ。現在、南米諸国の経済一体化などさまざまなことが論議されているが、南米はまだ文化として若いということを忘れてはいけない。アイデンティティが作られている途中にあると思うんだ。」

彼らの南米大陸縦断は 自分探しの旅 であつたというより、どのような旅も 自分探しの旅 を含んでいる。その旅が困難さに満ちていればいるほど、自分探しの旅も困難さに直面しており、しかしその分だけ 自分探し は困難さの中から掘り起されていくだろう。サレス監督はゲバラたちの冒険旅行について語りながら、その映画を撮る自分たちについて語っているようにみえる。「青年二人が冒険を求めて、南米大陸を縦断していくうちに、社会的、政治的な現実を目覚め、将来につながる何かをつかみ取っていく。この旅自体が、ラテンアメリカン・アイデンティティともいうべきものなんだ」という言葉の中には、ゲバラたちの南米大陸縦断の冒険を撮るだけでは収まりきれないものを自分たちは感じている、ゲバラたちが「将来につながる何かをつかみ取ってい」たなら、自分たちもこの映画を通じて、「将来につながる何かをつかみ取っていく」ことによってこそ、映画は真に撮られていくのだ、という監督たちスタッフの自負も伝わってくる。

「この旅自体が、ラテンアメリカン・アイデンティティともいうべきものなんだ」と語るとき、監督は自分たちの映画もそうなんだ、だからこそ、「英語ではなくスペイン語でやること、ラテンアメリカの俳優を使うこと」という条件を提示してきたのだ、という裏声がよく聞こえてくる。「南米はまだ文化として若い」し、「アイデンティティが作られている途中にある」という言葉はしたがって、「アイデンティティが作られている途中にある」中に、自分たちも、自分たちが作る映画も放り込まなければならない、そして自分たちこそがラテンアメリカン・アイデンティティをかたちづくっていくという

決意と覚悟を確認しているといえよう。この映画が《青春映画としての輝きを放っている》とすれば、それは革命家になる前の若きゲバラの青春真っ只中の冒険旅行を描いているからではなく、監督たちが若きゲバラたちを撮りながら、自分たちがその映画を撮ることによってしだいに帯びてくる発熱作用が映画全篇に行き渡っているからだと思われる。

「ゲバラの息子カミーロに、ハバナで会ったときに、『エルネストは、チェとなる以前から、自分が何者であるかわかっていた』と言われたんだ。この旅はあまり知られてはいないが、ゲバラの人生においては、とても重要な部分を占めている。できれば、この映画を通して、彼の今まで知られていなかった側面を理解してもらいたい。それと同時に、あの時代に、あの場所に、まだ自分が将来何者になるのかわからずにいた、若い青年二人の姿を見せたかった。僕らはこの二人を近い存在として描こうとしたんだ。ゲバラ像は、今まで伝説的な存在に祭り上げられすぎていると同時に、そのイメージは商業的に使われすぎてもいる。西洋世界では残念なことに、ゲバラはポップ・アイコンとして流通しているからね。そうした実像との隔たりを埋めて、ゲバラが持っていた本来の人間性を取り戻したいという気持ちがとても強くあった。そうした状況を変えたかったんだ」

ゲバラの息子がサレス監督に言った、「エルネストは、チェとなる以前から、自分が何者であるかわかっていた」という言葉は、注意深く聞き取る必要があるだろう。なぜなら、「何者であるか」を革命家という記号に結びつけて納得すると、何も考えられなくなるからだ。おそらくここでいわれていることは、自分が何に関心を惹き寄せられ、自分がどのような方向を目指す人間としてあらわれなければならないのか、がゲバラにはみえていたということだ。使命、という言葉がここで浮かんでくる。医学生であったゲバラにはもとより、医者としての使命が当初から設定されていたが、そのような予め約束された使命ではなく、自分が出会った現実から強く要請されてくるような使命にほかならなかった。現実から押し迫ってくる使命をゲバラが驚愕もうとした道程が革命家としてみえただけであって、この点を理解しなければ、革命家という言葉が死後と化している時代の中で、ゲバラは彼岸の存在として我々の前から遠く去られてしまうだろう。

ゲバラがアルベルトと滞在したペルーのサンパブロにあるハンセン病療養所を去る時に、別れの宴席で次のようなスピーチを行うシーンがある。「僕らのような者が皆さんの代弁者にはなれませんが、今回の旅でより強く確信しました。便宜上の国籍により国が分かれています、我々、南米諸国は一つの混血民族なのです。ゆえに、偏狭な地方主義を捨ててペルーと統一された南米大陸に乾杯しましょう」。もし彼がこのスピーチに含まれていることの意味を生涯忘れずに、南米大陸の統一の夢にむかって生きつづけていたなら、ゲバラにとってこのスピーチはまさしく新たな出発宣言にほかならなかった。つまり、彼は自分の生涯を南米大陸の統一という夢の実現に費やしようとしたからだ。人は何かをするために生まれてきたという言い草をゲバラに向かわせると、彼はその夢を実現するために生まれてきたということなのだ。

自分探しの旅　が非常に強く意識化されてくるほどに、探すべき自分が深く見失われ

ていることが若者たちに感受されているこの時代の中に若きゲバラを置いてみると、時代を超えた共通性が浮かび上がってくる。アルベルトとゲバラの二人の若き医学生にとって、南米大陸縦断という図らずも 自分探しの旅 によって決定的に明らかとなったのは、医学に対する考え方そのものであった。アルベルトは自分が突き進む医者^{イサック}の途をそのまま肯定することになり、ゲバラのほうは医者^{イサック}の途を否定することになった。いいかえると、アルベルトは医学の世界の中に自分の居場所を見出し、ゲバラはそこに自分の居場所を見出せなくなったのだ。ゲバラにとってこの旅は、自分が突き進もうとする医者^{イサック}の途が根底から揺さぶられ、引っくり返されることが予見される旅になってしまったのである。医者^{イサック}の途をいくら突き進んでも解決不可能な、困難な課題が旅の現実から押し寄せてくるのを感じ取ってしまったのだ。

映画のシーンをいくつか思い出しながら、ゲバラが医学の世界からは垣間見ることのできない現実^{イサック}に接することになった象徴的なシーンを取り出してみよう。二人を運んでくれたおんぼろバイクに別れを告げて、炎天下のアタカマ砂漠をヒッチハイクするチリで出会ったのは、疲れ切ったみすばらしい夫婦だった。夜になって一緒に焚き火を囲みながら、夫婦がここは自分たちの家が建っていたが、地上げ屋に追い出されたことや、仕方なく息子を預けて旅に出たものの、共産党員であるために警察から逃れながら職を求めての放浪生活であることを語りだす。ここへ来たのは、この先のチュキカマタ鉱山で働くため、運がよければ仕事にめぐりあえるし、危険な仕事だが思想を問われないとあって、二人に妻が「仕事を探してるの？」と訊く。否定する二人に妻は「じゃあなぜ旅を」と尋ねる。ゲバラは答えに詰まり、言い出しかねるように「旅をするためです」と言葉を押し出す。

二人はこの共産党員の貧しい夫婦と出会うことによって、初めて気軽な気持にはなれなかった。ゲバラはこの上なく衝撃を受けていた。彼らの過酷な現実から、生活を背負っていない自分たち青二才の気楽な冒険旅行が一拳に照らし出されるのを感じ取っていたのだ。彼らは彼らであり、自分たちは自分たちである、ではなく、どうして彼らはそんなに貧しく、喘ぎながら鉄鎖に縛りつけられた現実の中で生きなくてはならないのか、どうして自分たちは何も考えず、女のあとを追いかたり、バカを言い合ってフザける日々を過ごしているのか。どうして同じ放浪の旅でありながら、夫婦の旅には切羽詰まった悲哀と困難が一杯詰まっており、どうして自分たちの旅には尻軽と空騒ぎしか詰まっていないのか、ゲバラは息苦しさを感じていた。世界は無数の現実を我々に当てはめており、ある現実と別の現実との目も眩むような落差を浴びて、ゲバラは見る置きどころを失っていたのだ。

たぶんゲバラの旅行記『チェ・ゲバラ モーターサイクル南米旅行日記』からの引用であると思われるナレーションが、この夫婦との会話の後に流れる。

「彼らの悲痛な顔が忘れられません。謎の失踪を遂げた共産党の仲間が海に沈められたのだと聞きました。最も寒い思いをした夜でした。と同時にこの奇妙な夫婦に人間として親しみを覚えた夜でした。」鉱山で多くの人々が人足として声がかかるのを待ってい

る次の場面では、「お前と隣のお前、さっさと行け。うしろのお前もだ。そこのお前もモタモタするな。さっさと乗れ、あとは帰れ！」と現場監督の男が人足を選び、男たちが次々とトラックの荷台に乗り込んでいく。夫婦のうち夫も呼ばれ、残りが散り散りになっていく光景を見て二人が現場監督に近づく。ゲバラは居たたまれなくなっていたのだ。「お前たちは何だ？」「ここは観光地じゃないぞ。うせろ！」という声に、何かをいわずにはいられなくなったゲバラが「みんな喉が渴いてる。水くらいやれよ！」と言い返すと、男は「早くしないと警備の者を呼ぶぞ。不法侵入だ。鉱山会社の私有地だぞ」と叫んでトラックに乗り、走り去る。ゲバラはそのトラックめがけて石を投げつける。

石を投げつけるゲバラの行為は、人間扱いをしているようには到底みえない現場監督の仕打ちに対する他愛ない鬱憤晴らしに映るが、彼の生涯の中にこの行為を位置づけると、象徴的な意味をもっていると感じられる。彼は走り去るトラックに石を投げつけながら、本当はこのような不当な現実にもかって石を投げつけていたのであり、その投げつけられた石が確実にゲバラ自身にも撥ね返ってくることを暗示していたからだ。石を投げつけることしかできない無力感は、ゲバラを石から銃の世界へと飛躍させていく根底になっていることを予見していたといえる。後でわかるが、恋人から「米国に行ったら水着を買ってきて」と手渡された大事な15米ドルを、アルベルトが空腹に耐えかねて何度も使おうと提案した誘惑を退けてきたにもかかわらず、アルベルトに内緒でゲバラが夫婦に手渡すという行為も、石を投げつける行為と同様に、自分がいま置かれている状況で一体彼らに何ができるかを考え尽くした挙句の無力感のあらわれにほかならなかったのだ。

二人にとってではなく、少なくともゲバラにとってこの夫婦に出会ったことが、旅の分岐点になった。彼らの現実を無邪気に通り過ごすことも、無視することもできなくなったのだ。山中に行くトラックに便乗するゲバラの目に映るものはもはや雄大な山脈ではなく、貧しい先住民の列であった。「チュキカマタを出ると世界が変わったようでした。アンデスを奥に進むほど先住民の数も増えます。彼らは自分の土地で家がないのです。トラックに乗せてもらいペルーに入りました。ノアルベルトは30歳に...ベネズエラはるか先です。祝う気力は残っていませんでした」というナレーション。ペルーに入ったクスコでもゲバラたちが耳を傾けるのは、「家畜の世話で忙しくて学校へ行ったことがない」とか、「私が子供のころは必要な物を買えるお金があった。でも今はお金もほとんどないし仕事もない」といったインディオの女性たちの貧しい現実であり、警察を使って地主に追い出されたというインディオの男性の不当に虐げられている過酷な現実である。

ペルーのマチュピチュでは眼下に広がる遺跡の厳然さに圧倒され、思わずゲバラはこう日記に書き付ける。「インカ人は天文学、数学、脳外科手術に長けていました。歴史が違っていたら、今はどんな姿になっていたでしょう？」「なぜか僕は郷愁を感じたのです。これほどのものを築き上げた文明が、なぜこの文明に滅ぼされたのか...。」(以上、ナレーション)映画はインカ文明の壮大さに心を奪われた二人を描きだし、アルベルトが「決めたぞ。俺はインカ人の子孫と結婚する。インディオ党を結成し人々に投票

を呼びかけトゥパク・アマル革命を再現するんだ」と感極まっていたと、ゲバラが「銃なしで？ 成功するはずがない」と答える。アルベルトが大学内デモで逮捕された時、13歳のゲバラは銃でしか事態は解決できないと語って、年長のアルベルトを驚かせたという逸話を連想させる場面である。

ペルーのリマではハンセン病治療の責任者であるペッシュ博士から衣食とお金のほかに、ペルー共産党創設者で先住民の解放を第一にした革命路線を提唱したマリアテギの本と、ペルーを代表する詩人でスペイン共産党にも所属したバジェホの本を読むようにと勧められる。「マリアテギは中南米の先住民と農場労働者による革命の可能性を論じている。『その革命は土地に根づいたものであるべきだ』と。『我々は少数ゆえに分裂してはならない』、『団結せよ』と。』（ナレーション）ゲバラたちは拍車を掛けるようにして南米の貧しい現実を矢継ぎ早に目にし、その現実を引っくり返そうとする革命思想に一直線に突き進んでいるようにみえるけれども、もともとが青年期のメモリアルジャーニーとして暇にまかせて計画した無鉄砲な冒険旅行であったから、旅のそのような基本的な性格と縁が切れる筈がなかった。ペルーのプカルパからサン・パブロまでのアマゾンの支流を下る船旅で、持病のぜん息の発作に襲われるゲバラを船室に運び込んで、文無しのアルベルトが賭博場で周囲の客に失笑されながら、^{はしたがね}端金を賭けて次々と勝ち続け、乗り合わせている目当ての娼婦としけ込む場面も挿入されている。（実はゲバラの恋人から預かった例の15米ドルを鉱山の夫婦にあげたことが、その金を当てにしていたアルベルトがゲバラに迫ったことによって明らかにされるのである。）

二人の旅もいよいよ終盤に差し掛かる。アマガン川を挟んで向こうの南側に患者が、北側のこちら側に医師や看護婦が居住するハンセン病の療養所を二人は訪れる。モーター船で患者のいる対岸に向かう途中、シスターたちの規則で手袋をするように忠告されるが、二人は断る。岸に着いて紹介される一人一人の患者と素手で握手する二人に、患者たちのほうがとまどっている。ゲバラは手術を拒否する若い女性の患者の病室を訪れて、彼女と言葉を交わす。咳込むゲバラを彼女が心配して、「自分が病気だから医者になったの？」と訊き、「かもしれない。最初に覚えた言葉は『注射』だった。人の役に立ちたいんだ」とゲバラが答えると、「時間のムダよ」「人生は苦痛よ」と彼女はいう。「そう、つらいよ。死を地獄へ追いつ返すために闘い続けなくては」と、ゲバラは力づける。

ここでも印象的な場面が描かれている。アルベルトがゲバラに「先生がカラカスの病院に俺を推薦してくれるそうだと嬉しそうに話すと、『よかった』という素っ気ない返事なので、拍子抜けしているアルベルトにゲバラは、ここの療養所が川の向こう側に患者を閉じ込めていることへの憤りを洩らす。自分の就職を無邪気に喜んでいるアルベルトに対して、ゲバラは弱者である病人を救う病院でも、現実の社会が貧しい人々を差別し、酷使しているのと同様に、患者を閉じ込めている医療の現実に絶望を感じていたのだ。女性の患者が医者になって『人の役に立ちたい』というゲバラに『時間のムダよ』と即座に返す言葉がここでゲバラの胸中に甦っていたかもしれない。患者たちには単に

病気によってもたらされる苦痛ばかりではなく、病院や社会そのものから隔離されていることの苦痛がその上に申し掛かっていたのだ。病気がもたらす苦痛はなるほど医学によって軽減されるかもしれないが、患者に対して社会が与える苦痛は医学ではどうすることもできない。社会の中で貧困に喘ぐ人々もまた、救済を求めている患者として映るなら、そのような患者に手を差し伸べるには、病院の中の医者ではなく、社会という病院そのものの中で働く医者が不可欠とされねばならない。ゲバラが自分のやるべきことは病院の枠組みを超えた、社会の中にあるとしたいに思い定めつつあった場面であるように思われる。

患者たちと共にサッカーに興じたり、日曜日のミサに出なかったために昼食が与えられなかった二人に、患者たちが盗んできた食事を次々に運んでくれるといった交流を拓ける中で、一週間の滞在期間が終わりに近づく。去る前々日にアルベルトがカラカスの病院からの採用通知をゲバラに見せ、お前はどのようなつもりだ、「来週で24歳だぞ」「将来を考えると？」と迫る。自分は「そろそろ落ち着くべきか。定職について恋人を作る。大人になれば？ お前は大学に戻って医者になるか？」と訊くアルベルトに、ゲバラは「まず帰る方法を見つけないと」と答える。カラカスの病院の医師になる予定のアルベルトにとって、この冒険旅行は終わりに近づいていた。ところが、ゲバラにとってはこの旅こそが自分にとっての何かの始まりであると感じていた。だから、この旅の先にある自分を見出すために、「まず帰る方法を見つけ」る必要があった。どのように帰ることによって、自分が旅の中で得たこと、感じたことをこの旅の続きとなしうるか、ゲバラは考え込んでいたのだ。

最後の夜、送別会とゲバラの24歳の誕生祝いを兼ねて祝賀会が行われ、食堂で医者、職員、シスターたちと共にダンスを踊った後、前述の部分を含むスピーチをゲバラが行う。このスピーチから別の色彩もみえてくるので、もう一度、全文を引用しておく。

「先生のご厚意に対し特別な形で謝意を示すべきでしょう。ですが貧乏旅行の身ゆえ言葉でしかお礼できません。／まず療養所のみなさんに心から感謝します。赤の他人の僕らを温かく迎え、身内の誕生日のように祝って下さいました。僕らは明日ペルーを発つのでこれはお別れの言葉にもなります。ですからこの言葉の中にペルーの国の人々への感謝の意を込めたいと思います。／（中略）僕らのような者が皆さんの代弁者にはなれませんが、今回の旅でより強く確信しました。便宜上の国籍により国が分かれています。我々、南米諸国は一つの混血民族なのです。ゆえに、偏狭な地方主義を捨ててペルーと統一された南米大陸に乾杯しましょう」

映画を通じて、この文章を通じてゲバラたちに同行してきた我々からすれば、若き日のゲバラがそこまでは語ってはいないが、どうしてもそこまで深く踏み込んで聞き取らなくてはならない言葉が、このスピーチから聞こえてくる。ゲバラのスピーチが誰に向かっているかは、はっきりしていた。目の前に集まっている医師や職員、シスターたちを突き抜けて、目の前に不在している対岸の向こう側に閉じ込められている患者たちに向かっていたのだ。だからスピーチの趣旨は、どうしてこのお祝いの席に患者たちが存

在していないのですか。どうしてあなたがたはそのことに疑問を抱かないのですか。「赤の他人の僕らを温かく迎え、身内の誕生日のように祝って下さ」る善良なあなたがたは、どうして身内同然の患者たちを「温かく迎え」ずに、対岸に見捨てるように放置しているのですか。「偏狭な地方主義を捨ててペルーと統一された南米大陸に乾杯」するためには、偏狭な医療主義を捨てて、本当の意味で患者と医者たちスタッフが対等の関係を築いて、統一された医療の南米大陸に乾杯することが大切なのではないのでしょうか。

本当に自分のスピーチを届けたい、別れを告げたい相手はこの会場に不在しているというゲバラの一途な想いは、会場を抜け出て一直線に暗い川岸に向かう。後を追って来たアルベルトに「向こう岸でお祝いする」という。「明日ボートを見つけてから行け。よせ」と止めるアルベルトに、「誕生日は今日だ」と返す。「夜なんかに泳いだら動物に食われちゃうぞ」「今まで何度も生き延びてきた」「今夜は違う。俺は助けにいかないぞ」「助けに来るよ」。ゲバラは夜の川に飛び込む。「おい！ 待て、バカ野郎！ お袋さんに殺される！ 戻ってこい！ 俺の言うことを聞け！」と叫ぶアルベルトの大声にみんなが駆けつける。「泳いで渡ると言って。泳ぎ切った者は？」と尋ねるアルベルトに、医者は「1人もいない」と答える。「戻るんだ、エルネスト！」とアルベルトは叫び続けるが、ゲバラは向こう岸目指して必死に泳ぎ続ける。対岸でも患者たちが騒ぎに気づき始め、集まってくる。こちらを目指して泳いでいるのがゲバラだとわかると、彼らの間から喚声が沸き上がる。

いうまでもなくゲバラが患者たちにむかって泳ぎ切るこの場面は圧巻で、観客に訴える感動的な場面だが、この一見向こう見ずな行為が彼自身に及ぼした効果は計り知れないものがあったと思われる。なぜなら、周囲がいくら制止しようとも、自分がやると決めたことは必ず果たされるという自信を彼に与えただろうからだ。この自信に支えられてカストロと共にキューバ革命を勝利に導き、その後ボリビア山中でアメリカのCIAに殺されて生涯を終えることになったことを考えるなら、彼にとって対岸の患者にむかって夜の川を独り泳ぎ切るこの小さな行為は、紛れもなく革命に匹敵するほどの大きな意味をもっていたにちがいない。全身を駆けめぐる血流が沸騰すると、可能であるかどうかにかかわらず、まず目の前の激流に飛び込んでいるというゲバラ特有の性格も、そこには浮き彫りにされていた。

翌朝、一晩中別れを祝い、惜しみ合ったであろう患者たち一人一人と抱き合って、別れを告げた二人は医者たちから贈られた筏に乗って川岸を離れていく。アマゾン川を下ってベネズエラのカラカスに着くと、相棒のアルベルトとの別れが待っている。飛行場でアルベルトがもう一度念を押す。「カボ・ブランコと一緒に働かないか？ 卒業してからでいい」と誘うと、「分からない。分からないんだ。この長い旅の間に何か起きた。その答えを見つけないんだ。...ひどい世の中だ」と、ゲバラは正直に答えるが、病院の中の患者に手術を行う医者の方を歩むアルベルトにむかって、問題は病院そのものを、社会そのものを手術するところにある筈だ、ということを友にあえて主張しないや

さしい配慮もそこから浮かび上がってくる。

ゲバラが貨物輸送機を登って行き、アルベルトに別れを告げる場面に、次のナレーションが被る。「これは偉業の物語ではない。同じ大志と夢を持った2つの人生が、しばし併走した物語である。僕らの視野は狭く偏りすぎていただろうか。僕らの結論は頑なすぎたのか。……かもしれない。／南米放浪の旅は想像以上に僕を変えた。少なくとも、もう昔の僕ではなくなっていた。」

52年1月4日、ブエノスアイレスを出発して、同年7月26日、ベネズエラのカラカスに到着するまでの8ヵ月に及ぶ、延べ12425^{キロ}の南米縦断の冒険旅行は、「想像以上に僕を変えた。少なくとも、もう昔の僕ではなくなっていた」と、旅を終えたゲバラはいう。チェ・ゲバラ（註 - 「チェ」というスペイン語は、“おい”とか“ねえ”とか呼びかける言葉）と親しみをこめて後年呼ばれる男が、この若き日の冒険旅行から生み出されてくることを思うと、確かに彼自身にとって冒険旅行であったにちがいない。エルネスト・ゲバラ・デ・ラ・セルナからチェ・ゲバラへの冒険旅行として誰もが読み取るし、それは仕方のないことなのだが、サレス監督が映画パンフの中のインタビューで、「『革命に生きる10年後のゲバラ』の若き日を描くようなことはしなかった」と語っていることに触れていえば、我々観客はあくまでもチェ・ゲバラの若き日を念頭から消去できないだろうけれども、人生は若さから成熟（老い）に常に向かっていくものであり、冒険旅行の中に「『革命に生きる10年後のゲバラ』の若き日」が存在していたのではなく、「革命に生きる10年後のゲバラ」へと行き着くことになる、まだ運命に驚愕されているとはいえない、彼自身にとってなにものでもない匿名の青年が自分の旅を重ねている一途な姿を覗き込む必要があったにちがいない。

若い二人の旅の姿にキュンと胸が締め付けられるような、甘酸っぱい切なさ搔き抱かれる中で、この文章も終わりに近づいているが、ゲバラの生涯にわたる冒険旅行も終わりに近づきつつあったことを暗示する、フィデル・カストロ宛（死の二年半前）の65年3月21日頃の「別れの手紙」（HP『ヘタレ論 チェ・ゲバラ』より）を以下に掲載しておく。

《いま私は、さまざまのことを思い出している - マリア・アントニアの家ではじめて君に会った時のこと、君が遠征に参加するように私にすすめた時のこと、そして準備の時のあの緊張のすべてを。

ある日われわれは、死んだら誰に知らせたらいいのかと尋ねられたことがある。その時われわれ全員は死の現実的な可能性に衝撃をうけた。あとになってわれわれは、革命のなかでは（それが真の革命である限り）人は勝利するか死ぬかなのだ、ということを知った。勝利にいたる途上で多くの同志が倒れた。

いまではすべてにあまり劇的な調子を感じることはないが、それはわれわれが成熟したためだ。だが、いまも生と死は繰り返されているのだ。キューバ革命が私に課した任務を私はキューバ国内においては果してしまったように思う。だから私は君や同志や君の人民 - それはすでに私のものでもある - に別れを告げる。

私は党指導部における私の地位、閣僚の職、少佐の階級、キューバ市民としての条件を公式に放棄する。法的には私をキューバに結びつけるものは何もない。ただ、任命書を破り棄てるようにはあっさりとは棄てることができない違う性格の絆があるだけなのだ。

（中略）私は偉大な日々を生きてきた。君の傍でカリブ海の危機の輝かしく悲劇的な日々をわが人民の一員として生きたことを私は誇りとしていた。

あの日々の君ほど輝かしい政治家はほとんどいない。私は躊躇することなく君に従い、君の思考方法に自分を同一化したこと、君と同じ方法で危機と原則を理解し評価したことを誇りに思っている。

世界の他の土地に私のささやかな努力を求める大衆がいる。キューバの指導者としての責任から君には許されないことが私にはできる。別れの時が来たのだ。

私が喜びと悲しみの混じり合った気持でキューバを離れるのだということを知って欲しい。私はここに建設者としての私の最も純粋な希望と、私が愛するもののうちの最愛のものを残して……そして、私を息子のように受け入れてくれた人民と別れていくのだ。このことは私の心を深く切り裂く。私は新しい戦場に、君が私に教えてくれた信念、わが人民の革命精神、最も神聖な義務を果そうとする感情を携えていく。そして、どこであろうと帝国主義と戦うのだ。戦いが私の心のすべての傷を十分に慰め癒すのだ。

もう一度言うが、キューバに関して私はいっさいの責任から解放された。だが、キューバは私にとってひとつの模範だ。私がどこか異国の空の下で最後の時を迎えたら、私の最後の思いはキューバの人民、そして特に君に向かうだろう。君の教えと模範に感謝する。私は私の行動において最後までそれに忠実でありたいと思う。私はこれまでわれわれの革命の外交政策に常に従ってきた。これからもしたいと思っている。どこにしようとも私はキューバの革命家としての責任を自覚しているだろう。そして、そのように行動するだろう。私は私の子供や妻に何も残しておかないが、それは別に心残りのことではない。そのほうが私には望ましいのだ。国家が生活と教育に十分なことをしてくれる以上、私はそのほかに何も望まない。

君とわれわれの人民に語りたいことはたくさんあるが、それはもう必要のないことなのだろう。言葉は私が望むことを表現しえない。これ以上紙をよごすまでのこともないだろう。勝利に向かって常に前進せよ。祖国か死か。革命的情熱をもって君を抱擁する。》

死の別れを予感した手紙は子供たちにむかって、「世界のどこかである不正が誰かに対して犯されたならば、それがどんなものであれ、それを心の底から深く悲しむことのできる人間になりなさい」という一行を含んだ、父親からの伝言として残されている。最後に何もかも投げ捨ててキューバから出国したゲバラについて考えてみる。その詳しいいきさつや裏の複雑な事情について全く知らぬまま、「いまではすべてにあまり劇的な調子を感じることはないが、（…）だが、いまも生と死は繰返されているのだ。キューバ革命が私に課した任務を私はキューバ国内においては果してしまったように思う。」だから、「別れを告げる」と書かれていることに目を止めて、想像をたくましくしてみる。

おそらくゲバラにとって、キューバ革命の位置づけははっきりしていた。南米大陸を統一する終生の課題からすれば、キューバ革命の成功はそのための起爆剤とならねばならなかった。ところが、カストロとゲバラたちによって国家権力が奪取されたキューバの置かれている現実、そんな生易しいものではなかった。新国家キューバを支配下に置こうとする、目の前の超巨大なアメリカの凄まじい圧力や干渉からキューバを守り切るのに必死であった。59年のキューバ革命からキューバ危機を挟んで6年間、彼らは必死にアメリカからキューバを守りつつ、革命政権を軌道に乗せるのに全力を尽くし、新国家の建設へと邁進していった。キューバが着実な歩を進めつつあったとしても、しかしそれはキューバー国の問題であって、南米革命への橋頭堡^はないしは根拠地としてのキューバという観点からは程遠かった。南米革命の「遠くを見つめる」ゲバラからすれば、キューバ国内に留まりつづけることは、南米革命からの離反を意味した筈だ。

もちろん、キューバを出国して、一兵士に戻って革命を志すことは身の危険を晒すことであったが、予測されるキューバ国内の権力争いから身を引き離す点では、賢明でもあり潔かった。つまり、ゲバラは革命家が陥る権力者としての愚劣だけでなく、彼の理想主義が現実の中で湾曲していく地獄に陥ることからも免れ、夢の革命の一兵士を最後まで貫き、銃弾に倒れたのである。そんな彼の生き様が、60年代の全世界的な学園闘争に参加した若者たちの共感と憧れを惹き起こさない筈がなかった。ゲバラのことを考えると、いつも「よど号」の若者たちのことを思い出す。彼らは当初「あしたのジョー」^{あしたのジョー}として、キューバ行きを目指していた。彼らの頭の中に革命家の鏡のようなゲバラ像が焼き付いていたことは想像に難くない。途中の給油時に逮捕される危険を考えて北朝鮮に路線変更したが、もしキューバを目指していたなら、彼らはどうなっていただろう。ゲバラのように革命のためにたたかって、カッコよく死ねただろうか。ただ、マンガチックで愚劣な「拉致問題」などとは無縁の生涯を送っていたことは間違いないだろう。

2004年11月28日記

